
青春街道薦進中！

国高ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春街道騒進中！

【ZPDF】

Z37030

【作者名】

国高コウチ

【あらすじ】

ありえないミラクルから始まる恋もある・・・かもしれない？

ドーベルマンとチワワの凸凹であるやふやな関係。

下駄箱から靴を取り出すと、学校用の上履きから履き替える。

待ち合わせ場所はわかりやすく校門で、先生に呼び出された親友はまだしばらくかかるだろう。

学年毎に違う色をしたネクタイの群れが、一日拘束された学び舎を抜け出るべく歩みを進める。

部活の開始時間が近い所為か、グランドに向かつて走る姿もチラホラ見つけられた。

ブレザーのポケットに入っていた携帯電話のバイブが振動を伝えてきて、何気なく手を入れる。

通行の邪魔にならないよう、校門に背をもたせると着信を告げたメール画面を開いた。

「お母さんからだ。件名：ベストショット？」

行き交う生徒の何人から掛けられるさよならの言葉に返事をしながら、携帯を操作してメールを見る。

アップで表示された『それ』に、私は歓喜の声を上げた。

「小太郎！！」

去年拾った柴系のミックス犬である我が家のおアイドル、小太郎が愛らしく寝転がり視線を向けてくる姿が写っていた。

今にもきゅんきゅんと啼き声が聞こえてきそうな上田遣いに、胸が高鳴る。

くりんと巻いた尻尾は残像が見え、ぴこりと立つた耳に息が止まりそうだ。

ちらちらとこちらを伺う視線が痛いが、そんなことよりも小太郎だ。目に入れても痛くないと断言できるくらいに可愛がっている最愛の存在がこちらを見ているのだ。

他の視線など、アウトオブ眼中に決まっている。
世界の中心で愛を叫べる。

「小太郎可愛い！」

「……………そ…う…か」

「うんうん。もう、小太郎以上に可愛い子なんてこの世に存在しないよ」

「そ…う…か？」

「そ…う…だ…よ！」

「……………好…き…か？」

「大好き！世界で一番、大好きだよ！」

「判つた。それなら……………」

「俺と付き合おう」

「……………は…あ…？」

唐突な言葉に、一気に世界を引き戻され顔を上げる。

ブレザー姿は見慣れた自分の物と同じで、彼が同じ学校の生徒であると判断できた。

しかもネクタイの色からいつて年下。つまりは一年生だ。
にしては見上げるくらいの長身で、いつも傍に居てくれる幼馴染よりもまだ高い。

私の身長が低いことを考慮に入れても、彼の身長はずいぶんと高い。整つてはいるがいさか鋭すぎる眼光は、何を睨み付けることがあり

るのかと問いただしたくなるほどにこちらを見ている。

鮮やかに染められた金髪は無造作に撫で付けられ、切れ長の瞳からは無言の迫力が溢れていた。

耳にはめられたピアスは、紅玉だらうか。

随分と目立つ見た目をしているが、初めて見る顔だ。

周りを見るに遠巻きにしているギャラリーが、『あの子絡まれてゐるのか?』『あれ一年の上杉だよな』『先生呼んでくる?』などと無責任な発言を繰り返している。

先生を呼ばなくともいいからどうにかして欲しいと望むのは、高望みなのだらうか。

私が周りを見てゐるのに気がついたのか、『上杉』へんとやうは周囲を視線で一薙ぎする。

一瞬で黙りこくつた彼らの仕草から、これはもしかしてヤバイ傾向と遅まきながらに頭の中の警鐘がなった。

そう言えば先ほどから私の心の声に相槌を入れてくる存在がいた気がする。

もしかして、ちゅうどいこタイミングで声を掛けてきていたのは彼だろうか。

そうすると、聞き捨てなら無い台詞があつたような気がして、もう一度しつかりと彼を見た。

「ええと・・・君

「普通に呼べばいい

「普通・・・?」

「苗字は上杉だ。1年1組出席番号3番身長185cm体重72kg 成績はあんたと同じで主席。運動はなんでも大丈夫だ。誕生日は11月2日でプレゼントくれるならあんたの手作りがいい。座右の銘は降りかかる火の粉は払う

「はあ」

「身長は俺の方が圧倒的に高いが、年齢はあんたの方が上だ。だから、あんたは俺を呼び捨てにすればいい。相田桃先輩」

「私のこと知ってるの？」

「有名だ。戸口大和が猫ツ可愛がりしている妹分で学園のマドンナ真崎静香の親友」

「また微妙な内容で・・・」

「あんたの想いはちゃんと受け取ったから

「は？」

唐突な言葉に前後のつながりが見えず、展開についていけない。目の前の彼が何処の誰かは良くわかつたが、告げられた意味がわからず脳みそが空回りをする。

いつたい何を言っているのか。

そんな私を気にすることなく、大きな手のひらで私の頭を撫でるとにつこりと笑つて口を開いた。

「世界で一番大好きだなんて、中々な口説き文句だ。気に入った」「はあ」

小太郎のための言葉を、何故彼が喜ぶのか。

笑顔がまぶしそぎて突つ込むことが出来ないでいると、爆弾は核並み威力で投下された。

それはもう、周りのギャラリーも巻き込んで。

「今日からあんたは俺の彼女だ。桃先輩」

子犬のような邪氣の無い笑顔で告げられた一言に。

『えええええええ！？』

反応されたのは私ではなく、周りのギャラリーの皆さんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3703o/>

青春街道薦進中！

2010年10月20日14時23分発行